笹舟

ヴィッセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
笹舟

【Ｎコード】
Ｎ８５６３Ａ

【作者名】
ヴィッセ

【あらすじ】
野に佇み、幾度も夢を見るヒルガオ。露草色の瞳のドクダミ。彼等を乗せた〈笹舟〉は何処へ行く。真夏のファンタジー。

一、〈野〉

野の傍らの水路で、笹舟は独り流されていた。苔の生えた、その古めかしい水路は、一直線に続いている。笹舟は、風の気紛れで野末に向うこととなった。

◆

太陽が満面の笑みを浮かべ、燦燦と光を降り注いでいる頃、ヒルガオは野に佇んでいた。彼以外には誰一人居ない。

暫くすると、空腹を訴える音が聞えた。低く、うねるような音だ。しかしヒルガオはソレすら気付かない風で、虚ろに視線を泳がせている。夢を見ているのかも知れない。

幾時間かが経ち、やがて青嵐に運ばれた聲が聞えてきた。ヒルガオは漸く夢から醒めたという目付きで、勢い良く振り返った。肩越しに一人の少年が居る。随分遠くから呼び掛けられたと思っていたのに、実際は殆ど隣にまで来ていた。

ドクダミはこの季節には似付かわしくない、陶器の様な色白い肌の少年で、露草を思わせる蒼い瞳が特徴的と云える。そしてその瞳は、洗練された何かしらのものを持っているようにも思わせた。

ヒルガオは先ほどとは打って変わり、凛凛しい表情でドクダミを見た。

「急に現れるなんて、びっくりするじゃないか。からかうのも、大概にしろよ。」

「急になんかじゃあ、無い。僕はずっと、あの校舎の窓から、君を呼んでいたんだ。それなのに、君ときたら見向きもしない。何をし

ていたのさ。」
「見ていたんだ、」
「何を、」
「お前だよ、ドクダミ。そっちこそ気付きもしない。」
話は絡み合った糸の様で、ドクダミは理解出来ずに首を傾げた。
一方ヒルガオは至って真面目な顔で、ドクダミを見据えている。彼は嘘はつけない質である。
ドクダミが怪訝な顔を向けているのを余所に、忽ち空腹感を覚えたヒルガオは、此処にお弁当を持って来なかったことを後悔した。

今日は快晴である。草の匂いが、鼻もとを掠めては一層濃くなった。

二、〈水球儀〉

ヒルガオとドクダミは、〈ミリト・ジェリ〉と云う名の学校に通っている。別棟には寮があり、校舎の位置関係が山中にあることを考慮して、生徒は其処で寝起きをする生活を送っていた。外界の森林の狭間は、小鳥や蝉の聲で満ちている。そういった〈音〉の中で、彼等は半生を過ごす。

〈ミリト・ジェリ〉は木造で、形は茶碗を引っ繰り返して置いたような、滑らかな半円である。何処の誰のものとも分からないが、そういった技術が随所に見られる校舎でもあった。硬質の幹を、いとも自然にカーヴさせているかのような、人為的な見境を付けさせない不可思議さと曖昧さを感じさせている。

一方、別棟の寮は〈スパン・シュガ〉と、生徒達の間では、親しみを込めた愛称で呼ばれていた。其処は〈ミリト・ジェリ〉とは打って変わった長細い構造になっており、全生徒と幾人かの教師分の個室や食堂、大広間、浴場等が納められている。

それにしても、両棟を通して、ヒルガオやドクダミのような生徒達の入ったことのない場所は数多く、内輪の立場ながら、なかなか霧に遮られているかのような全容の見えなさである。しかしそれらに疑問を抱く者は稀(まれ)で、然程(さほど)関心のない様子で生徒達は通り過ぎて行く。何故なら、ソレが彼等の《当り前》であったからだ。

◆

授業は坦々と続いて行く。この〈ミリト・ジェリ〉では、午前午後共に三時間ずつに授業が割り振られている。クラスは一学年九つあり、生徒数はかなりのものだった。

この前、ある授業で、ヒルガオは〈水球儀〉に興味を持った。海底を写し出す、あの碧い大きな球体だ。それは〈ミリト・ジェリ〉の一階、入ってすぐのホールに、ヒルガオが見上げる程の体格で佇んでいる。支柱には誰かの名前が彫ってあり、後に先生に聞けば、卒業生の手作りだといった。

その〈水球儀〉は美しかった。海水に見立てた水は海の碧を模し、光の入り具合によっては、オーロラのように揺らめく。海底は砕いた貝殻を固めて作り、水面下には模型魚や人魚が穏やかに遊泳している。小さくも大きい世界が、確かに息づいていた。

◆

ヒルガオは〈野〉に佇んでいた。太陽の恩恵を受けた肌に、白いティーシャツが映えている。

午後の三時間を終えたヒルガオは、何かに導かれるようにして、此処まで歩いてきた。

〈野〉は学校の前側に広がっており、元来グラウンドのような役割を担っていた。だが近年、生徒達が〈野〉に繰り出すことは数少なくなって行き、代わりにその殆どを〈ミリト・ジェリ〉や〈スパン・シュガ〉で過ごすようになっていた。その為、ヒルガオのような、外に出たがる少年は不思議がられていた。

「ヒルガオ、君は本当に外が好きなんだね。」

ヒルガオが野に佇んでいると、きまってドクダミが顔を出す。彼は微笑んでいた。

「お前達こそヘンなんだ。勉強なんて、退屈だろう。あんな場所には、長居したく無いのさ。」

「けれど君は、〈水球儀〉が好きなんじゃあ無いのか。ほら、さっきも見ていただろう。」

彼に〈水球儀〉のことは話していなかった。春に転校してきたばかりのヒルガオは、風変わりなこの学校の生徒達に溶け込まず、ま

してや自分のことはあまり話さない質であった。
不意を付かれたヒルガオは、ドクダミの顔を見つめた。
「前にね、水球儀を見つめている君を見掛けたことがあったんだ。」
放課後、授業を終えたドクダミが螺旋の中央階段を下り、一階に辿り着こうとした時のことだった。〈水球儀〉は、丁度中央階段を下りたその先に設置されている。ドクダミは普段通り、その横を通り過ぎて校舎を出ようとしていた。その時、一人の少年と肩がぶつかってしまった。ドクダミはごめん、と反射的に謝ったものの、どうやらその聲は、少年には届いていないようである。
少年は、少し前傾姿勢になって、〈水球儀〉の海中を覗き込んでいた。普段なら誰も見向きもしないソレに魅入る少年を、ドクダミは呆然と見つめた。

「あの時の君、とても好きそうな顔をしていたんだ。それは此処の生徒がしたことのない表情さ。と云うより、出来ないのかも知れない。」
ドクダミは足下の草を爪先でいじり、ヒルガオから視線を外した。
「それから、君は何かに集中すると、周りに起きた一切のことは分からなくなるよね。昨日だってそうだったろう。なんて集中力だ。」

少し笑い聲を立てながらドクダミは云った。今日の風は穏やかだ。水路の水も、緩やかに流れている。
風に弄ばれるドクダミの髪の毛が、銀色に輝き、波打って尾を引いた。

三、〈スパン・シュガ〉

その後ヒルガオとドクダミは〈スパン・シュガ〉に戻っていた。長細い、緑色の格好をして佇んでいるこの宿舎も、〈ミリト・ジェリ〉と同じ木で造られている。

夕方になって、あの蒼かった空はすっかり雲に侵食されていた。微かに灰色掛かった綿飴が、気怠そうに横たわっている。今にも雨を降り注がせそうな表情だ。

日光が届かなくなった宿舎内はほの暗い。通常は陽が沈む頃に行う筈のランプ点灯を、生徒達は早々に済ませていた。二人は一歩遅れた形で火を点ける。因(ちな)みにこのランプは、触れるだけで発火するという代物である。そしてソレは、取付けた部屋の主のみが点灯出来る仕組みになっている。ヒルガオの部屋のランプをドクダミが触ったところで着火しようがないのだ。

各自が自室の表札上のランプを点灯し終えれば、長い長い廊下に、二つのラインが完成した。

その時、誰かの聲(こえ)が後方から聞こえてきた。

「遅かったじゃないか、ドクダミ。何処へ行っていたんだ。」

「〈野〉に出ていたのさ。」

「〈野〉に、」

「あぁ。先程までは晴れていて、気持ち良かったよ。」

ヒルガオはこの人物を知らない。無論、名前も分からない。ドクダミは困惑するその人物に微笑み乍(なが)ら応答していた。

「アケビ、もう夕食は済ませたのかい。」

「話を逸らすな。そんなことはどうだって良いんだ。君はどうして、」

「理由なんて、必要無いだろう。自然なことさ、」

「自然なものか。それとも、興味本位なのか。何れにしたって、僕は納得出来ない。」
「君が納得しなければ、僕は行動してはならないと云うのかい。ソレこそ、僕は納得出来ないよ。」
「ドクダミ、」
「何が正しいのか、この目で見定めたいんだ。僕たちは知らな過ぎるから。」
ヒルガオには話の内容がさっぱり分からなかった。けれどアケビと呼ばれたその少年が、深刻な表情を見せていたので重要なことなのだろうと思った。
ヒルガオは抜き足差し足で部屋に引っ込んだ。

扉を慎重に閉めてから、彼は室内ランプを点灯した。ランプは徐々に明るさを増し、部屋の一角から奥の方までを露(あらわ)に照らし出した。まだ昼間の熱気が少し籠もっている感じがする。
自室の家具等の配置はそれぞれ自由に行われている。そこでヒルガオは、この真四角の部屋を解放的に利用していた。小さなタンスとクローゼットを入って右側に、左側には机を設置している。他には何もない。というのも、他の生徒ならばベッドや音楽機器なんかを部屋に持ち込んでいたりするのだが、ヒルガオはそういったものに関心が薄く、小鳥たちの囀りを音楽にして敷布団生活を送っている。ヒルガオはあまり物欲のない少年だった。その時腹部から音が聞えた。彼は忽ち空腹感を覚える。どうやら、かわりに食欲の比重が勝っているらしい。
腹部に手をあてがい乍ら、ヒルガオはドアの方を見た。二人はまだ会話を続けているのだろうか。
空腹に耐えかねたヒルガオが、取り敢えず様子を見にドアノブに手を掛けた時だった。同時に数回ノックされる音が聞える。
「ヒルガオ、」
ドクダミの聲がした。彼の聲は、少し高音乍ら安定した印象を与

える、そんな聲だ。
ヒルガオは手を掛けていたドアノブを回し、正面に彼を迎えた。
「話は済んだの、」
「あぁ、大したことじゃ無いのさ。気にしなくていい。ソレより、一緒に夕食を食べに行かないかい、お腹、空いているだろう。僕もペコペコだ。久々に〈野〉に出たせいかな。」
「今日の献立は何だろう、」
「こんな雨の降りそうな日は、きっと麺類さ。」
軽快に会話を弾ませ、二人は〈食堂〉へ足を運んだ。

◆

着くと、殆どの生徒の姿はなかった。皆とうに食事を済ませてしまったのだ。それでも、ヒルガオとドクダミが坐(すわ)った席の三つ奥に、アケビと一人の少年が居た。恐らく、アケビが話し終えてから、その後ヒルガオたちのように二人で来たのだろう。ヒルガオは何となく居心地の悪さを覚えていた。
〈食堂〉は全生徒が坐って食事が出来るほどのスペースがある。そもそも、この〈スパン・シュガ〉は5階建てなのだが、此処の上部だけはその5階分丸々が高い吹き抜けになっており、天井には透明なガラス張りを施している。快晴の日には、室内に居乍らにしてあの蒼い空を仰ぐことが出来るのだ。〈食堂〉という割には実に小洒落た空間だった。
結局の処麺類ではなかった夕食を口に運び、ヒルガオたちは沈黙していた。3つ向うの席に坐っているアケビとその隣の少年も同様だ。普段なら話し聲や笑い聲が稠密(ちゅうみつ)している筈の広い〈食堂〉は、食器を使い熟(こな)す際に出るカチャカチャという音しか響かせていなかった。
「ドクダミ、」

ドクダミが漸(ようや)く食べ終わろうとした頃、既にヒルガオの皿の上の山は跡形もなかった。一足先にフォークを置いたヒルガオは、天を見上げている。

「雨が、落ちてきた。」

5階分の高さもある、あの吹き抜けの透明な窓を擦り抜けて、ヒルガオの頬や服に染みを作った。

三、〈スパン・シュガ〉・・

思わず嚥下(えんか)してしまいそうだ。ヒルガオは目を細めて、天から降り注ぐ液体を全身に浴びていた。不思議とその場を抜け出す気分にもならない。寧ろ元来自身が欲していたような、そんな感覚が脳裡(のうり)を満たしている。

雨足は一段と加速し、遂には肩の辺りにまで水嵩を高めた。まるで外界も〈食堂〉も洪水にあったかのような有様だ。

「顔をお貸しになって。」

ヒルガオははっとして我に返った。話し掛けてきたのは、アケビと共に来た少年だ。彼は水を掻き分け乍ら近付き、ヒルガオの両肩を掴んだ。

「まさか君、今日お水を飲んでいらっしゃらないとか。」

「……水、」

ヒルガオは首を縦に振った。彼は〈ミリト・ジェリ〉に来てから殆ど水分を摂取していない。環境の変化に対応しきれていなかったため、様々な部分で不足しがちだったのだ。

「駄目よ、お水を欠いては。このままだと、そのうち死んでしまう。……私たちは脆(もろ)い、お分りでしょう。」

思ったよりも深刻な表情で少年は云った。ヒルガオには彼の感覚が分からない。多少水分を摂らない程度で、こんなにも大げさな返答になるとは予測出来なかった。

「君が呼んだの。」

降り注ぐ液体の中で四人は立ち尽くしている。まるでコンピュー

タがフリーズしたかのようにぴくりとも動かない。テーブルも椅子も既に役割を果たさなくなっていた。
「……僕が、」
漸(ようや)く口を開いたヒルガオは少年の言葉に困惑していた。疾(やま)しいことなど微塵もない筈なのに狼狽(ろうばい)してしまう。少年はソレを知ってか知らずか、ヒルガオとの距離を更に縮めて云う。
「君は欲したのでしょう、水を。だから君が呼んだの。」
「僕は、雨なんか降らせることは出来ない。」
「私は、そうは思わない。何故なら君は、少々変わっていらっしゃるもの。」
少年は右手をヒルガオの首に添えた。一方左手は肩を捕らえたままだ。少年はその態勢で話を続けた。
「何も恥ずべきことではないの。こういうことは、稀に起こりえる。ほら、ドクダミだって呼んだことがあるの。ねえ、」
少年は肩越しにドクダミを一瞥(いちべつ)し、その後再びヒルガオに視線を合わせた。

「私は君に、興味があるの。」

微笑んだ少年は青白い顔をしている。もう随分と日光を浴びていないような色具合だ。
「だって君、あの〈野〉に行ったのでしょう。私は一度も足を踏み入れたことがない。殆どの生徒も同様よ。なのにどうして、君は〈野〉にゆくの。」
少年の疑問は明確だった。全ての生徒が右に倣(なら)うこの〈ミリト・ジェリ〉では、ヒルガオの行動は奇怪なものとして生徒達の瞳に映し出されている。ヒルガオは尋問される窮屈さを覚えていた。
「もう、よせ。」
詰め寄っている少年を引き剥がし、ドクダミは水中に沈んでいるヒルガオの手首を、器用に捜し当てて掴んだ。

「雨はじきに止むだろうさ。もうこんなに降ったんだもの、十分だろう。」
彼がそう云った途端、雨足が徐々に弱まってくる。こうしてあんなにも降り注いでいた雨は、時間を追って一滴も落下しなくなった。水嵩も共に降下し、あっという間にもとの有様になり果てる。只奇妙なのは、膨大な水がつい先程まで存在していたという形跡さえも消え去っているこの光景だ。そして天井の吹き抜けの窓硝子も、何ら変哲が無いのがかえって気に掛かる。しかし雨は確実に降った。何しろ、四人の頭髪や衣服は水分をまとい、身体に寄り添っているのだ。
彼らは暫くの間、吹き抜けの窓硝子を見つめるしかなかった。

◆

靴底が高鳴っている。音は少し時間をかけて、大きくなったり小さくなったりを繰り返す。どうやら、誰かがこの長い廊下を行ったり来たりしているようだ。
「何をしているんだい、」
ドクダミが階段を上ると、一人の少年の姿があった。ヒルガオである。彼はしきりに歩いている。
「今日はどうしてか、体調が一等良いんだ。だからだまっていられないのさ。」
「ソレはやっぱり、水を摂取したからかな。」
ドクダミは壁に背中を任せて、足を交差させた。わけが分からないヒルガオは立ち止まり、前傾姿勢をとる。
「お前まで、何を云い出すんだ。からかうのも大概にしろよ。」
「からかってなんかいないさ。真面目に話している。」
「なら、云ってみろ。」
「あの雨のことをかい。」
「ああ。」

ヒルガオは彼があの雨について、確実に何かをに知っていると思っていた。というのも、昨夜アケビと共に現われた少年の『ドクダミも呼んだことがある』、といった発言に着目していたためである。そして彼は、もしかするとその雨を止ませることも出来るかも知れなかった。

「僕たちは水がなければ死ぬ。だから、水が欲しくなる。」

「僕はあの時、欲しいだなんて微塵も思っていなかった。」

「躰(からだ)が欲しがっているのさ。それも、来たばかりの頃からね。水球儀だって、」

ドクダミはヒルガオの手首を掴んで走り出した。

「僕たちは水を欲しがっているのさ。」

三、〈スパン・シュガ〉・・・

ドクダミはヒルガオの手を引き〈スパン・シュガ〉の外に出ていた。扉の前の石段に並んで佇んでいる。陽が沈んだ外界は昼間の蒸し暑さを逃がしきれておらず、虫の鳴き聲と共に沈澱していた。

「雨は何処へ消えたと思う、」

ドクダミは唐突に切り出し、ヒルガオを見据えた。薄暗い闇の中で、露草色の瞳は曇ることなく彼の瞳を捉えている。凪いだ夜風に足元の草が撫でられ、サァサァという聲を出した。

「僕はね、沼だと思うんだ。」

〈ミリト・ジェリ〉を出て〈野〉を暫く歩くと、左手に砂利の小道が見える。其処には大きなドングリの木と小さなドングリの木が根を張っており、ソレが沼への道しるべになっていた。その横を通過し更に進むと短い吊橋があり、その下が例の沼である。通称〈吊橋沼〉と呼ばれている。

「おかしいと思わないかい。あんなにも降っていたのに、草さえ濡れていやしなかったんだ。」

「お前は其処に行ったことがあるのか。」

「ああ、一度だけ。今の君と同様、入学仕立ての頃に迷い込んだのさ。もう随分前のことだけれど。……あの沼は特殊だ。」

〈野〉の方を虚ろに見つめた彼の瞳の僅かな翳りを、ヒルガオは見逃さなかった。きっと其処には何かがあるのだ。ヒルガオは今すぐにでも〈吊橋沼〉に赴きたい気持ちになった。

「今日はもう暗い。あそこの吊橋はなかなか高いんだ。落ちたら、そう容易にはいかないよ。」

ドクダミはヒルガオを悟ったかのように付け加えて、〈野〉に背を向けた。

「……僕たちは水を欲しがっている。」

ソレだけを云い残し、ドクダミは一人で〈スパン・シュガ〉の方へ去って行った。ヒルガオは何となく追い掛けてはならないような気がして、彼が小さくなってゆくのを見つめている。

「何が云いたいんだ、はっきりしろよ。」

ヒルガオは小声で悪態を吐いた。彼は所謂(いわゆる)欲求不満を覚えていたのだ。

此処は明らかにもと居た地域とは掛け離れており、それでいて不可解なことがしばしば起こる。第一、生徒たちからしてヒルガオの常識の範疇(はんちゅう)ではないのである。彼らは皆外に繰り出すことなく窮屈な四角い函(はこ)の中を好んで暮らしているし、そのせいで誰一人陽に焼けた者は存在しない。ソレだけでもヒルガオはそんな生徒達にひどく味気なさを覚えていた。同じ年頃なのにも関わらず、こうも異なる世界に居たのだろうか。そういった思いは、転入した春から度々感じてきた。そのためクラスにも馴染むことなく過ごしてきたのである。けれどこのままでいられる筈はないと思っていた。何故なら楽しかった故郷の残像が、心臓に穴を開けるからである。

◆

今日は珍しく目覚めが悪い。真四角の開放的な自室で、ヒルガオはぼんやりと目覚めた。朝日は窓をすり抜け額や手足を露にし、小鳥の囀(さえず)りがいつものように彼の躰を起そうとしている。昨日の有余った元気さは何処へ行ってしまったのだろうか。服を着替え、顔を洗っても、気概は一向に湧かなかった。

その時、誰かがコンコン、コンコンとノックをする音が聞こえてきた。その人物はゆったりとしたペースで扉を叩いている。

「ヒルガオ、」

ヒルガオには粗方察しがついていた。彼の部屋を訪れるのは、ド

クダミくらいのものなのだ。ヒルガオはノブを廻し、日光が射し込む室内に招き入れようとしたが、彼が一人で訪れていないことに気が付いた。
「一昨日はごめんなさい、私はリンドウと云うの。」
もう一人は、〈食堂〉で雨が降った際にヒルガオに詰め寄った少年であった。彼は名乗った後にしきりに謝罪の言葉を述べた。あっけらかんとした真四角の部屋に射し込んだ日光が三人を包み込む。
「あの時はつい興奮してしまってね、貴方の気持ちを考えもしなかったの。それで、良ければと思ったのだけれど、」
リンドウは乗り出すようにしてヒルガオに顔を近付けた。
「一緒に、〈吊橋沼〉へ遊びにゆきませんか。」

〈吊橋沼〉は、〈野〉を暫く進むと左側に見えてくる砂利の小道の先にある。ソレを前提として、彼はものを云っているのであろうか。ヒルガオは些(いさささ)か虚を突かれた感覚に陥った。
「本当はね、私も〈野〉に行ってみたかったの。あんな緑の中でお昼寝をしたら、さぞかし気持ちの良いことでしょうね。貴方が〈野〉に行くようになってから、私随分想像していたのよ。」
ヒルガオは開いた口が塞がらないといった様子で、瞳を輝かせるリンドウを見ていた。期待感に溢れた彼の瞳は硝子玉の様な光沢を持ち、丸味を帯びている。
「君は〈野〉が嫌いではないの、」
「まさか。まだ一度も足を踏み入れたことは無いけれど、その時が来たならばきっと好きになるわ。貴方を見てそう確信したのだもの。」
彼はにっこりと笑みを零(こぼ)し、少し笑い声を上げた。ヒルガオの表情もやっと柔らかいものとなる。
「ドクダミ、この子やっぱり素敵ね。」
リンドウはドクダミの肩を数回叩いて、また少し笑い声を上げた。

「放課後が、今までにないくらい楽しみよ。」

三人が去った後の部屋は、物静かにも時計の秒針の音が響き渡っている。今日の授業を終えたら、〈吊橋沼〉に遊びに行くのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8563a/

笹舟

2010年10月21日13時25分発行